

ある。これから判断すると、本遺跡における溝状ピットの年代は、おおよそ縄文時代中期以降から弥生時代中葉以前と思われる。

(赤平智尙)

前比良遺跡溝状ピット計測表

No	グリッド	長軸(上・中・下)cm	短軸(上・中・下)cm	深さcm	標高 m	長軸方向	備考
1	L~M-103	391・310・296	172・98・22	212~235	109.24~109.44	N-78°-W	
2	P~Q-97	425・345・368	185・32・22	257~270	114.10~114.16	N-73°-W	
3	N-95	276・—・215	—・—・—	125~140	115.67~115.92	N-41°-W	
4	N-101	321・295・360	81・—・18	176~199	110.05~110.98	N-72°-W	2号住居より古い
5	N~O-96~97	(333)・295・360	186・65・30	175~213	113.84~114.05	N-45°-W	
6	Q~R-95	(430)・—・—	—・—・—	—	—	N-87°-W	3号住居より古い

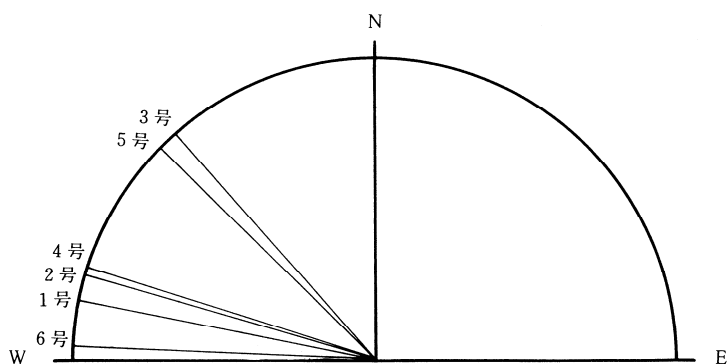


図27 溝状ピット長軸方向

第4節 地滑りについて

第1号溝状ピットに端を発し、次々に地滑りに因る遺構の分断そして移動が明らかになったが、その時期と遺構との関連について若干触れてみたい。まず、地滑りの状況であるが、調査区内で検出した20基の遺構中、地滑りを観察できたのは、第3号堅穴住居跡ピット1および3、第1号溝状ピット、第2号溝状ピット、第4号溝状ピット、第1号土壇、第7号土壇の7基だけである。これらの遺構は、ほぼ1直線上に並ぶ。地滑りは、基本層序第Ⅶ層（南部浮石層）と第Ⅷ層（ローム層）の層理面で生じており、第Ⅷ層上面では、地滑りの時に発生した高熱のために赤褐色に焼け焦げた痕跡が残る。この第Ⅷ以下を掘り込んで構築された遺構から、この現象が確認できたものである。

各 遺 構 の 地 滑 り 観 察 表

遺 構 名	グリッド	底面	標 高 m	滑 り 角	滑 り 幅 cm	滑 り 方 向
第 3 号住居 Pit 1	P-97	VII層	116.675	—	20	北
第 3 号住居 Pit 3	P-97	VII層	116.675	—	20	北
第 1 号溝状ピット	L～M-103	XI層	111.682	13°	48～65	北
第 2 号溝状ピット	P～Q-97	XII層	116.255	9°	20	北北東
第 4 号溝状ピット	N-101	XI層	112.962	13°	40	北北東
第 1 号土壌	L-104	VII層	113.20	—	35	北北東
第 7 号土壌	L-104	VII層	111.129	12°	45	北北東

この表からもわかるとおり、地滑りが発生した遺構はすべて第Ⅷ以上掘り込まれている。また、地滑りの幅は、馬の背状の台地の高位面では約20cm、中腹では40～60cmであり、最下位の第1号溝状ピット付近が最大のズレである。また、地滑りの起こった方向は、北ないし北北東であり、これは、台地の傾斜とほぼ一致する。

さて、地滑りが直接の原因で、この様に遺構が分断された例は、八戸市の牛ヶ沢(3)遺跡がある。そこでは、八戸火山灰Ⅵ層中でこの現象が生じており、4メートル近くも移動した事実が報告されている(春日：1984)。その時期は、遺構との関連から縄文時代前期末葉以降から晩期中葉前後と推定している。では、本遺跡において、地滑りが発生した時期について考えてみたい。上限で最も可能性があるのは、8世紀中頃に構築されたと思われる第3号竪穴住居跡の主柱穴が、この地滑りによって分断されていることから、8世紀以降であることは間違いあるまい。ただし、下限については推定できる資料が無いので不明である。では、これだけの現象を引き起こすだけの天変地異ならば、文献に記録されてはいないだろうか。この時期の天災について、「文献史料から見た古代奥羽での天災」(鈴木：1982)の論考がある。それによると、奥羽地方では古代に限定すれば8世紀中葉以降だけでも、実に4回の大地震に遭遇している。このほかにも、鳥海山をはじめとする火山の噴火も日本三代実録等に記録されている。さらには、地滑りを引き起こす原因として大雨に因るとも考えられる。本遺跡の各遺構もこれらのいずれかが要因となって、8世紀中葉以降に起こったものと思われる。

(赤平智尚)